# 日本中国語学会々報　2023年12月

https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/

◆目次◆


ご挨拶　　竹越　孝（日本中国語学会会長）……1
2023 年度全国大会総括……2
2023 年度学会奨励賞の選考経緯……4
理事選挙開票結果報告……5
支部例会実施報告　2023.6 - 2023.12……5
会議報告……9
例会および全国大会開催のお知らせ……21
事務局からのお知らせ……21


## ご挨拶　　竹越　孝（日本中国語学会会長）

11 月 4 日・5 日の両日、目白大学（新宿キャンパス）で開催された第 73 回全国大会が終わりました。閑静な住宅街にあるキャンパスに足を踏み入れると、受付に並ぶスーツ姿の学生さん、忙しく動き回るスタッフの皆さん、書籍展示の賑わいなどが目に入り、ああ確かに全国大会はこういう感じだった、この雰囲気がまた戻ってきたと胸が熱くなる思いでした。4 年ぶりの対面形式、かつ初日はハイブリッドということで、ここ数年のオンライン開催とはずいぶん勝手が違ったことと思います。準備に多大な労力を費やしていただいた開催校と大会運営委員会の皆様に、改めて厚く御礼を申し上げます。

2022 年 4 月に発足した今期の事務局からニューズレターをお届けするのは、今回が最後になります。この 2 年間は、通常の学会運営業務に加え、昨年 10 月に刊行された『中国語学辞典』（岩波書店）に関わる諸手続きに多くの時間が割かれました。『中国語学新辞典』（光生舘、1969 年）から 50 余年ぶりに学会の事業として編まれたこの辞典は、お蔭様で順調に版を重ね、来年からは PDF 版としても全国の大学図書館等に販売されることになっています。関係する業務の多くは小野秀樹前会長の事務局から引き継いだものですが、契約書の締結、基金の処理、会員向けの割引販売、重版に伴う印税の処理等について、岩波書店の担当者や旧辞典編纂委員長の平田昌司先生と連絡を取り合いながら、手探りで進める毎日でした。この件は概ね一段落を迎えましたので、今後は会員の皆様とともに、この辞典が末永く使用されることを祈念したいと思います。

私は 2007 年のウェブリソース委員を皮切り

に、この学会でほとんどすべての委員を経験させていただきましたが、今回会長の任を退くにあたり、改めて学会運営が多くの無償の努力によって支えられていることを実感しています。就任して最初のニューズレターで、自分はもともと大規模な学会よりも小規模な研究会を大事にしてきた人間だと書きました。若い頃は、言わば業績作りを第一の目的として支部例会や全国大会にエントリーし、『中国語学』に投稿していましたが、ここ 15 年、多かれ少なかれ学会の運営に関わる中で、そうした自分本位の活動も、実は多くの先輩達の尽力の上に成り立つものであったことを再認識したわけです。来年 4 月以降は一会員として、いかに後進にバトンをつなぐか、いかに日本の中国語学を継承し発展させていくかを模索していきたいと思います。

次期の会長は佐々木勲人先生に決まりました。会員の皆様には、新会長のもとでより一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。

［2023 年 11 月 30 日記］

## 2023 年度全国大会総括

### Ⅰ．今年度大会総括

第 73 回大会は、目白大学（東京都新宿区）を会場に、11 月 4 日（土）・5 日（日）に開催されました。

(1) 参加者数

参加者総数は 245 名、うち招待者が 2 名、一般参加者が 243 名、また一般参加者のうち 1 日目のオンライン参加者は 51 名でした。書籍展示は 18 社（賛助会員 14 社、非賛助会員 4 社）でした。

(2) 総評

今大会は 4 年ぶりに対面で開催することができました。11 月初旬とは思えないほどの好天に恵まれ、久しぶりの再会を祝うにふさわしい陽気の中で活気に満ち溢れた大会となりました。各会場では、オンライン開催とは異なる温度感のある質疑応答が交わされ、また休憩時間においても議論が交わされる様子が散見され、参加者皆さまがそれぞれに充実した時間を過ごされたことと拝察するところです。

目白大学の教職員・学生スタッフの皆様には大会までの長期にわたり、周到な準備を行っていただきました。初日の会場が東京都内を眺望できる 9 階であったことに象徴されるように、各所に気遣いを感じながら大会を進行することができたのは、ひとえに開催校スタッフ各位の並々ならぬご尽力によるものであり、衷心より感謝申し上げます。

大会 1 日目は、関西大学・山崎直樹会員と関西大学・水本篤教授による『言語研究と生成系 AI』と題した招待講演が氷野善寛会員の司会で行われました。山崎直樹会員は「AI を用いた中国語研究の可能性」の演題で、ChatGPT を使った様々な言語研究の可能性について述べられました。ChatGPT が得意とする文章生成能力は、類義語研究のみならず、類似構文の研究、言語あるいはジェンダーの視点からみた談話研究に活用できることを指摘されました。また効率のよい検索、あるいは文やテキストのアノテーションなど基礎的データの収集に活用できることなどを具体的に示されました。水本篤教授は「英語研究における AI の最前線」の演題で、生成 AI 技術の進展と研究への応用

について包括的に説明されました。ChatGPT の言語解析能力は、メタファーを抽出することができるほどであり、論文等の要約のみならず、英語学習者の書いたエッセイの自己評価や、英語での論文執筆を校正する際に使えることが示されました。一方で、事実の検索には向かないこと、カウントが得意ではないことなど、できないことも挙げられました。「そこに AI はあるんか」が冗談ではないほどに、今後は研究に AI が活用されていくものの、AI がどれだけ進化しても、言語学者の専門性が必要とされることを強調されました。

続いてのワークショップは、3 グループに分かれて行われました。氷野善寛会員企画の「近代日本の中国語教材の多様性―ヒト・モノ・トコロ・コトバ」では、氷野会員の他、遠藤雅裕、奥村佳代子、塩山正純、石崎博志各会員により、近代の中国語教科書の多様性について論じられました。内田慶市会員企画の「周縁資料による官話研究の可能性をさぐる」では、内田会員の他、木津祐子、佐藤晴彦、李云、大槻美幸各会員により、欧文資料、満漢合璧資料、琉球や長崎も含めた近代日本の官話資料等を基にした官話研究の可能性について議論されました。呉青青会員企画の「中国語の自然会話における聞き手行動の会話分析研究」では、呉会員の他、張麗、陳力、吉陽各会員により、“是吧”、“真的＋X”、“就是(说)”および舌打ちが相互行為としての会話の中で果たす役割について報告されました。QR コードを提示して質問を受け付けたグループもあり、対面参加者のみならずオンライン参加者にも配慮した質疑応答がなされました。

大会 2 日目は、例年通り分科会会場での口頭発表およびポスター発表が行われました。発表件数は、それぞれ 41 件、6 件でした。

今年度は、1 日目のみオンライン参加を可能としたため、事前参加登録をお願いすることになりました。昨年までとは異なる方式であったにも関わらず、187 名の方にご協力いただきました。

また開催校のご尽力により、校内に託児所を設けることができました。利用者は 1 日目が 1 名、2 日目が 2 名でした。託児所の設置は、大会参加に伴い生じる会員の負担軽減を目的とし、継続的な研究活動を学会としても支援するという意味合いがあります。来年度も開催校と協力しながら、託児所が設置できるよう計画していきますので、必要な方はぜひご利用ください。

(3) 今大会で見られた問題・課題

まず、比較的大きな問題として挙げられるのは、分科会の口頭発表の際に、発表資料を投影するためのアダプターの不適合でした。発表資料を投影する際には、発表者自身の PC を用意すること、アダプターは HDMI または RGB のみであることは、8 月末公表のプログラムに掲載していましたが、特に海外会員に周知されていませんでした。会場では、開催校スタッフの個人のアダプターを借用する、司会者あるいは他の発表者の PC を借用することにより、結果的には、いずれも用意した発表資料を投影することができました。今後は、発表者向けの注意事項は中国語版も用意し、周知を図りたいと思います。

その他、当日の会場の問題としては、廊下の騒音やポスター発表会場における聞き取りにくさという点が挙げられました。書籍展示やポスター展示の配置について、今後より適切になるよう対応していきたいと思います。

予稿集原稿の提出にあたっては、若干の遅延はあったものの、大きな混乱はありません

でした。一方で、予稿集提出後に辞退が 2 件あり、編集作業に影響がありました。採択後の辞退については、今年度からすべての方に理由書の提出を求めることとなりました。この 2 件および採択直後の辞退 1 件のうち、2 件はやむを得ない事情であると考えましたが、1 件については「過失」に当たるものとして厳重に注意しました。また予稿集原稿の書式については、概ね遵守されていましたが、一部変更を加えたもの、あるいはテンプレートを使用していないものがありました。予稿集は、電子版のみとなり、全て大会運営委員会委員により編集作業が行われます。円滑に作業が行われるよう、今後とも提出期限および書式の順守をお願いいたします。

### Ⅱ．来年度の全国大会にむけて

来年度の第 74 回大会は、関西外国語大学御殿山キャンパス（代表：吉田泰謙会員）で開催されます。開催形態、開催日、および、ワークショップの応募期間、分科会研究発表・ポスター研究発表の応募期間等の重要事項については、決まり次第、学会ウェブサイトにてお知らせします。

開催準備及び大会運営に関しては、今年度の経験をふまえて改善を進めてまいります。今後も合理化・簡素化を図って開催校および運営委員会の負担を減らしていきたく、引き続き会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

（大会運営委員会）

## 2023 年度学会奨励賞の選考経緯

編集委員会では、2023 年 3 月の第 1 回編集委員会において、『中国語学』第 269 号に掲載された論文の中から学会奨励賞の選考対象とする論文 3 篇を選出し、さらに 5 月に開かれた第 2 回編集委員会において、選考対象論文 3 篇について慎重な協議を行った結果、以下の論文を 2023 年度の学会奨励賞授賞論文の候補とすることに決定し、この案が理事会において承認された。

学会奨励賞受賞論文
前田　恭規氏
動量詞とアスペクト無標識完了表現

【選考の経緯】

本論文は、動量詞を伴う動目構造がアスペクト標識「了 $_{1}$」を付帯しないにも拘らず、場合によっては完了を表すという現象に注目し、その使用環境と已然と解釈される動機を、「V+O+“一”+動量詞」特に「VO 一眼」を考察対象として解明したものである。

「VO 動量詞」が「了 $_{1}$」を伴う頻度については先行研究の間で見解の相異が存在しているが、本論文は動量詞を 1 つのグループとして議論を行う先行研究とは異なり、動量詞の種類によって「V+O+“一”+動量詞」が已然を表す用例の数に大きな差異があることを、コーパスを利用して明らかにした。そして、「了 $_{1}$」の省略が起きる要因を考察し、発話表現との関係性や場面描写の機能に注目して分析を

進め、「VO 一眼」は「それ自体、継起的な動作でありながら、眼前の行為に重なり合う、同時的動作をも表している」という結論を導いた。その機能は「了 [1]」とも「着」とも異なる性質を有するものであり、コンテクストの観点からそれを明らかにしたことが、重要な知見を提供したものとして評価された。

審査の過程においては、本論文が考察対象とした「一回性の動作・変化が生じた〈已然〉事態」を表す「V+O+“一”+動量詞」の用例は実際には「VO 一眼」のみであり、対象とする現象が限定的であるという問題点も指摘された。しかし、本論文が扱ったテーマは現代中国語の文法、なかんずくアスペクトの根幹に関わるものであり、今後大きな研究へと発展する可能性を秘めている。よって、編集委員会は全員一致で本論文を奨励賞授賞論文として推薦し、理事会においても承認された。

本論文の著者が今後も鋭敏な問題意識を持って諸現象の原因・メカニズムの解明に取り組み、研究の更なる高みを目指すことを期待している。

（編集委員会）

## 理事選挙開票結果報告

2023 年 10 月 28 日～2023 年 11 月 3 日にオンラインにて理事選挙が行われました。開票の結果、以下の方々が次期（2024-25 年度）会長および理事に当選されました。

ただし三宅登之会員から、本務校で部局長の職にあることなどを理由に会長就任を辞退したい旨が理事候補者に説明されました。候補者の過半数はこれを是とし、候補者 8 名の互選により、得票数第二位の佐々木勲人会員を次期会長に選出しました（「会長及び理事選出に関する内規（→第 10 条関連）」参照）。なお副会長は、後日新会長が理事の中から委嘱することになります。当選者並びに各得票数は以下の通りです。

■投票総数：616 票（うち、有効投票総数 566 票、白票 50 票）

■得票数：

| | | |
|---|---|---|
| 1. | 三宅　登之 | 33（会長辞退） |
| 2. | 佐々木勲人 | 31（会長） |
| 3. | 松江　　崇 | 29 |
| 4. | 加藤　晴子 | 25 |
| 5. | 下地早智子 | 24 |
| 6. | 伊藤さとみ | 22 |
| 7. | 山崎　直樹 | 20 |
| 8. | 鈴木　慶夏 | 18（以上理事） |
| 次点 | 清原　文代 | 16 |

（選挙管理委員長　更科慎一）

## 支部例会実施報告　2023.6 - 2023.12

**◆関東支部例会**

◇2023 年 8 月 12 日（土）午前 9 時～、オンライン（Zoom）での開催

・荒木典子（東京都立大学）：『満漢並香集』について

京都大学人文科学研究所蔵『満漢並香集』は、これまでに大きく取り上げられたことのない作品である。序文には、尚玉章なる人物（三藩の乱で知られる尚可喜の曽孫）が訳したとある。内容は、銭書による『西廂記』を題材とした遊戯八股文『西廂時藝』を満洲語訳したものである。季永海（2009）によると、文芸作品の翻訳のピークは順治から康熙年間までで、本書はそれより少々遅い。また文芸作品そのものの翻訳ではなく一つの作品から派生したものをさらに満洲語に訳したという点でも異彩を放っている。なおかつ漢人の尚玉章が手掛けている点も特筆すべきである。本発表では、本書の書誌学的な特徴、満漢対応に見られる特徴を報告する。

・劉淼（上智大学）：白話小説における“則個”の使用について――『三遂平妖伝』と『金瓶梅詞話』を中心に

助詞“則個（箇）”は、宋元時代から存在し、特に話本で頻繁に使用される助詞である。文末に置き、命令・願望・祈求などの語気を示す。明代の白話小説でも一部使用例が見られるが、作品によっては使用頻度が大幅に減少している。さらに、清代以降から現代に至るまで使用が消滅し、全く使われなくなった。出現から消滅までの期間は短く、これまでの研究として、吕叔湘（1941）、香坂（1983）、侯会（1988）、阿部（1989）、黄新强（2010）、王泽宇・黄婉梅（2023）などがある。本研究では、『三遂平妖伝』と『金瓶梅詞話』を対象にして、“則個”の意味や用法、出現傾向を分析し、消滅までの過程を解明することを目指す。

**◆関西・四国支部例会**

◇2023 年 12 月 3 日（日）午後 1 時半～、オンライン（Zoom）での開催

**〇研究発表**

・董楽（大阪大学・院）：仮定複文“要是 P，就可以 Q 了。”の反既定性について

本研究は仮定複文“要是 P，就 Q。”における “就”と“可以”の共起を取り上げ、共起成否の具体的な様相を明らかにする。本研究の結論は以下の二点にまとめられる。①仮定複文“要是 P，就 Q。”の後節において“就”の後に助動詞“可以”が共起する場合、その共起が文末“了”の出現を要求する。②“要是 P，就可以 Q 了。”はある既定の事態に対して反する仮定をし、そこから導き出される新しい結果を述べる仮定複文であり、反既定性を有する。

・李梦迪（名桜大学）：「非許可」を表す使役構造“我让你＋VP”

口語表現に現れる中国語の使役構造“我让(/叫)你＋VP”構造には、文字上の意味に反して「非許可」を表す用法がある。話し手が是認的な形式を用いて否認的な意味を表そうとする動機づけはこれまで明らかにされていない。本発表では、“我让你＋VP”構造における人称代名詞の制限および字義通りの“我让你＋VP”構造との関連を考察する。聞き手が話し手の意に反する動作行為をすでに実行しているコンテクストにおいて、話し手は見かけ上の「許可」を用いることで、ある望ましくない結果が生じた責任を聞き手に帰し、聞き手に対して行う処罰・報復行為を正当化する目的があると考えられる。

**〇講演**

・林範彦（神戸市外国語大学）：漢語方言の否定現象の類型：東アジア諸語における位置付け

本講演では類型論的な観点から漢語諸方言の否定現象の特徴について整理し、その東アジアにおける地域言語学的な位置付けを検討する。漢語方言における否定については陳・盛(2020)などの研究を参考にしつつ、他方、Miestamo (2005)などの類型論的な枠組みを見据えた整理・分析を行う。内容としては「標準否定」を主軸に、時間表現との関係性、否定のスコープ、否定命令/禁止などを分析し、漢語方言の否定のもつ多様な特徴を掘り起こしたい。

**◆中国支部例会**

◇第 1 回例会：2023 年 6 月 10 日（土）午後 1 時～、広島大学東広島キャンパス中央図書館ライブラリーホール

・張軼欧（島根県立大学）：中級中国語学習者に関する“把”構文の誤用調査

教育現場では、“把”構文は常に学習の難点として扱われる。これまでの研究成果は、日本語を母語とする中級学習者を対象とする研究でも、特定の文型に関する研究はほぼ白紙の状態である。そこで小論では、中級学習者を対象に、「把+N1+V+P(前置詞)+N2+L(方位詞)」という文型の誤用調査を行い、誤用パターンを示した上で、誤用発生の主な原因は教科書と関係があることも明らかにした。次に、中級学習者に“把”構文の教授を強化し続ける必要があることを明らかにした。そして、意味と形式の視点から“必把句（必ず“把”構文を使わなければならない文）”の種類を整理した。これら結果から、教育現場における“把”構文の扱い方に関する提案を試みる。

・周碩（広島大学・院）：現代中国語における単字日本語借用語の流入――2000 年以降を中心に

現代中国語における日本語借用語の借用状況は 2000 年を境に少しずつ変化してきた。赤平（2009）や沈（2008）の先行研究によると、2000 年まで量詞や接頭語以外の単漢字語はほぼないという。また、佐藤（2015）では接触の知見から名詞は最も借用語となりやすいこと、動詞は借用しにくいこと、単漢字語は名詞と見なされないためあまり借用されなかったことが指摘されている。しかしながら、2000 年以降は単漢字日本語借用語が増え、定着しつつある。本発表はその傾向に注目し、中国における単漢字日本語借用語の流入状況を把握したうえ、これら借用語の受容過程を通して、単漢字借用語の増加が現代中国語にいかなる影響を及ぼすかについて考察したい。

・丁雷（慶應義塾大学）：有关公共汉语课发音指导教学活动的汇报——以岛根县立大学的公共汉语课为对象

本发表是笔者在岛根县立大学从事汉语教学活动的总结。汇报包括两个内容。第一、在三年的任教生涯中，笔者以提高公共汉语课的语音教学水平为目标，开展了多项语音教学技术的研究。包括开发了一套发音指导系统、建立了语音偏误数据库（轻声）以及构筑了一个能够服务于语音教学研究的网络平台（“Ding 的语音教学研究工作坊”）。本发表将介绍以上各项目的情况。第二、为了改善学生的汉语发音质量，笔者利用学生的课余时间，开展了为期一年的发音指导活动。在这一年的调查中，笔者收集了不少发音偏误，提出了设置“发音能力指数”（简称 PCR 值）的设想，并尝试用这个指数来观察学生发音能力的成长变化。本发表将介绍这项发音指导活动的开展过程以及效果。

**◆九州支部例会**

◇第 1 回例会：2023 年 7 月 16 日（日）午後 1 時～、福岡大学学部共通室文系センター棟 14F

・路浩宇（九州国際大学）：不定 NP 主語が用いられる受身表現に関して――コンテクストの視点から見る

中国語の受身文では一般に定（definite）である受け手を表す名詞句が主語となり、不定（indefinite）である名詞句（以下 NP と呼ぶ）は主語とならない。このため“这/那个杯子被摔破了。”のような文が典型的な受身文として認められ、“一个杯子被摔破了。”のような文は成立しないとされている。ところがコーパスには一定数量の不定 NP が主語となる受身文が観察される。本発表では不定 NP が主語となる受身文の成立する動機づけに関心を寄せ、具体的には次の課題に取り組む。1.不定 NP が主語に用いられる受身表現がなぜ有標の形式として成立するのか。2.不定 NP の主語が受身文で用いられた際に、どのような語用論的機能を果

たすのか。

・宋雨潤（九州大学大学院）：現代中国語の新聞記事と会話における指示表現に関する研究――談話モデルからのアプローチ

これまで、現代中国語の指示表現に関する研究は、主に text-as-product の立場から考察しており、言語使用域が指示表現の使い分けに与える影響がほとんど考慮されていない。これに対し、本発表は discourse-as-process の考え方に立脚しており、新聞記事と会話の言語使用域における指示表現の異なる振る舞いについて考察を行う。その結果、新聞記事では読み手に特定の登場人物や出来事を正しく同定してもらう必要があり、名詞による指示表現が圧倒的に多かった。一方で、会話では典型的な現場指示以外に、二人称における不特定の人物を指すという非典型的な指示用法の例も非常に多かった。最後に、2 種類の言語使用域の類似点として、指示詞が最も少ないということが判明した。

・羅子皓（熊本大学大学院）：「ヴァーチャル訛り」としての四川訛りに関する研究

本研究では、田中ゆかり（2021）が提示する「ジモ方言」と「ニセ方言」の区別を踏まえて、「川普」という呼び名で広く認知されている四川訛り(accent)の普通話を（1）四川方言話者が普通話を話す際に自然に現れる四川訛り、（2）他地域出身の人が模倣する四川訛り、（3）四川出身の普通話話者が意識的に強調する四川訛りという三種類に分けて典型的な映像資料を対象に分析した。その結果、その音韻特徴は話者の地域意識の強弱と緊密に関連しているという結論が得られた。以上の結果は、田中が提示する区分が中国の方言使用の中にも存在することを示唆している。

・黄欣悦（熊本大学大学院）：親族呼称“小姐姐”の意味と用法をめぐって

中国語では、親族呼称は待遇を表現する際に重要な役割を果たしている。親族呼称の“小姐姐”は、親族呼称の“姐姐”と“小”と結びついたもので、親しい若い女性に対する擬親族呼称に転じて用いられる。また、擬親族呼称の“小姐姐”の使用範囲の広がりにつれて、社会通称になる傾向も見られる。本稿では、まず、BCC コーパスに基づいて“小姐姐”の語構成、意味変化の経路を分析した。そして、鈴木（1973）が提出した「人称代名詞」の枠組みを参考とし、“小姐姐”の用法を「対称詞的用法」と「他称詞的用法」に分けてそれぞれの共起表現を解明した。この分析を通して、中国語学習者が中国語の親族呼称の規則について理解を深めることが望まれる。

◇第 2 回例会：2023 年 12 月 16 日（土）午後 1 時～、福岡大学学部共通室文系センター棟 15F

・孫盈盈（九州大学大学院）：“自己”の総称用法に関する研究

これまでの“自己”の総称用法に関する研究は、そのほとんどが機能の記述に終始しており、メカニズムに関する考察は行われていない。本発表では、上山（2000）や Hoji et al.（2003）の「連動読み」などの概念を、東郷（1999）の談話モデル理論に組み込む形で利用し、小説の地の文と自然会話における“自己”の総称用法のメカニズムの解明を試みた。その結果、“自己”の総称用法は「量化」を通して実現されることが明らかになったほか、明示的な量化表現が現れる場合には、「量化」は基本的に話し手の言語文脈領域において行われるが、明示的な量化表現を伴わない「隠れた量化」は、主に話し手の共有知識領域において行われることが判明した。

・宮下尚子（福岡大学）：元曲元刊本にみえる“甚”およびその他疑問詞の分析

近代漢語の疑問詞“甚”の来源は“是物”“是勿”“是沒”などの音が縮約されたものである、という見解は諸研究者の間で概ね一致していると見るべきであろう。元代の白話資料である元曲元刊本においても、疑問詞として“何”の他に“甚”“甚麼”“甚物”“甚的”等さまざまな形態を見ることができる。本発表では、元曲元

刊本にみえる疑問詞の分析、および元曲の韻文としての側面に注目して、従来あまり議論されてこなかった“甚”の声調と、従来は接尾辞とされてきた“-物” “-麼” “-沒”等が疑問詞として機能しているのではないかということを例文を引用しながら論じる。

## 会議報告

**■ 2023 年度第 2 回理事会**

日時：2023 年 11 月 3 日（金）16 時～18 時
（TKP 新宿カンファレンスセンター　ミーティングルーム 5D）

出席者：竹越孝（会長）；丸尾誠（副会長）；秋谷裕幸、遠藤雅裕、佐々木勲人、古川裕、吉川雅之（以上理事）；吉川雅之（編集委員長[兼任]）；橋本永貢子（大会運営委員長）；鈴木慎吾（ウェブリソース委員長）；秋谷裕幸（学界展望編集委員長[兼任]）；大西博子、西村英希、濱田武志（以上幹事）

欠席者：三宅登之（理事）

**■ 2023 年度評議会**

日時：2023 年 11 月 4 日（土）10 時 15 分～11 時 45 分（目白大学（新宿キャンパス）10 号館 9 階 10903）

出席者：構成員 46 名（定数 64 名）

**■ 2023 年度総会**

日時：2023 年 11 月 4 日（土）17 時 30 分～18 時 15 分（目白大学（新宿キャンパス）10 号館 9 階 10900）

**【報告事項】**

1. 一般報告

1.1 会員動向（10 月 1 日現在）

西村幹事より以下の報告があった。

- 会員数（2022 年 10 月 1 日から 1 年間の増減：住所不明者、年度末退会予定者を含む）

| | | | 増減 |
|---|---|---|---|
| 総会員数（賛助会員をのぞく） | | 919 名 | ＋25 |
| （内訳） | 顧問 | 8 名 | ＋2 |
| | 名誉会員 | 11 名 | －2 |
| | 通常会員 | 833 名 | ＋17 |
| | 団体会員 | 4 名 | ±0 |
| | 海外会員 | 63 名 | ＋8 |
| 賛助会員 | | 19 社 | ±0 |

- 〔昨年度除籍者〕57 名（国内会員 49 名 / 海外会員 8 名）［2022 年 9 月 16 日付］
- 〔今年度除籍予定者〕34 名（国内会員 31 名 / 海外会員 3 名）
- ご逝去　2 名（桜井　明治名誉会員、小林　立名誉会員）

＊会員動向については、直近の数字ではなく、4 月 1 日付の状況を春の理事会に、10 月 1 日の状況を秋の理事会に報告する。［除籍者は 10 月中に確定］

1.2. 支部例会関連

濱田幹事より以下の報告があった。

・過去一年間の実績は『中国語学』270 号「彙報」を参照。

2. 編集委員会報告

吉川委員長より以下の報告があった。

・『中国語学』第270号は2023年10月31日に1,070部を発行した。

・学会奨励賞授賞者として以下の1名を推薦した。

前田恭規（明治学院大学・非常勤講師）「動量詞とアスペクト無標識完了表現」

・『中国語学』の論文投稿方法を改定した。『中国語学』第271号からはウェブフォームのみで論文投稿を受け付ける。

・『中国語学』の論文投稿方法の改定に伴い、『中国語学』投稿規程と執筆要領などを改定した。投稿規程等の新旧対照表は会議報告の末尾を参照。

3. 大会運営委員会報告

橋本委員長より以下の報告があった。

〈報告事項〉

3.1. 第73回全国大会の準備状況

3.1.1. 招待講演

(1) 講演者：山崎直樹（関西大学）
題目：AIを用いた中国語研究の可能性

(2) 講演者：水本篤（関西大学）
題目：英語研究におけるAIの最前線

3.1.2. ワークショップ審査結果

5月31日（水）に応募締切。応募総数3件。審議の結果、下記のとおり採用することに決定した（6月8日持ち回り委員会決定）。

(1) 周縁資料による官話研究の可能性をさぐる（企画者：内田慶市会員）

(2) 中国語の自然会話における聞き手行動の会話分析研究（企画者：呉青青会員）

(3) 近代日本の中国語教材の多様性―ヒト・モノ・トコロ・コトバ（企画者：氷野善寛会員）

3.1.3. 研究発表（分科会・ポスター）応募・採択結果

6月30日（金）に応募締切。応募総数68件。内、有効応募総数60件。不受理8件（同一の応募者による二重応募）。審査の結果、口頭発表43件、ポスター発表7件の計50件を採択した。不採択数は10件であった（7月26日持ち回り委員会決定）。

採択結果公表後、辞退の申し出が3件（8月3日、10月9日、10月19日）あった。いずれも理由書の提出を求め、委員会で審議の結果、2件を「やむをえない事情」、1件を「過失」とし、注意および厳重注意とともに採択の取り消しを決定した。（8月12日、10月14日、10月27日持ち回り委員会決定）。

3.1.4 予稿集について

予稿集原稿は9月30日の締め切りまでにおおむね提出され、一部は督促後翌日までには提出された。予稿集の編成作業には大会運営委員会の委員5名が当たり、電子版は10月27日に公開された。

提出された原稿のなかには規定の書式と異なるものがあり、大きな変更を要するものは発表者に修正依頼をしたが、軽微なものは予稿集作成チーム内で調整した。

電子版は、不分割のファイルと各論毎のファイルの両方を作成し、発表原稿部分は通しでノンブルを入れ、また改変・改竄を防止するセキュリティをかけた。不分割のファイルには、目次から該当ページのリンクを作成した。なおデータ量削減のため、中扉および裏表紙は省略し、ヘッダーも付さなかった。

3.1.5. 大会参加申し込みと参加費の支払いについて

今回、1日目のみオンライン参加ができるようにし、またオンライン参加であっても参加費を徴収することとしたため、事前の参加申し込みおよび参加費の徴収が必要となった。諸事情により、最終的にはイベント管理システム（Peatix）を利用することとし、10月16日公開、10月17日にはウェブサイトに掲載するとともに、事務局から会員宛てにメールを送付してもらうことで周知を図った。

3.2. 第74回大会について

［学校名］関西外国語大学

［代表者］吉田泰謙会員
［日程］未定
［開催形態］対面

**4. 学界展望編集委員会報告**

秋谷委員長より以下の報告があった。

4.1. 2022 年学界展望の編集

2022 年「学界展望 語学」は 2023 年 10 月 7 日発行の『日本中國學會報』第七十五集に掲載され、また 2023 年 10 月 31 日発行の『中国語学』第 270 号に転載された。

4.2. 委員長および委員の交代について

・新旧委員の交代について

2023 年および 2024 年学界展望担当委員を次のように交代する。

「音韻」（旧）橋本貴子委員から（新）更科慎一会員（山口大学）

「方言」（旧）濱田武志委員から（新）鈴木史己会員（南山大学）

「語彙・文法（近世）」（旧）塩山正純委員から（新）永井崇弘会員（福井大学）

「語彙・文法（現代）」（旧）加納希美委員から（新）前田真砂美会員（奈良女子大学）

2023 年および 2024 年学界展望は以下の体制により編集することになる。

「音韻」更科慎一（山口大学）
「文字・訓詁」宮島和也（成蹊大学）
「語彙・文法（上中古）」楊安娜（北海学園大学）
「語彙・文法（近世）」永井崇弘（福井大学）
「語彙・文法（現代）」前田真砂美（奈良女子大学）
「方言」鈴木史己（南山大学）
「教育」小川典子（愛知大学）

なお新委員長については第 73 回全国大会以後に決定される。

以上は 2023 年度第 1 回日本中国語学会学界展望編集委員会（9 月 25 日～10 月 6 日メール審議）により承認された。

4.3. 2021 年「学界展望 語学」中国語版

・中国社会科学院が作成した 2021 年「学界展望 語学」中国語版を日本中国学会報《学界展望》中国語版翻訳補助チームのメンバーとして秋谷が点検した。

・語学分野担当の翻訳補助チームに対する 1 名の増員が日本中国学会で認められた。

**5. 中国語学セミナーについて**

竹越会長より以下の報告があった。

・第 5 回中国語学セミナーを以下のとおり開催した。

(1) 開催形態：オンライン（Zoom）開催
(2) 開催日：2023 年 9 月 9 日（土）14:00-18:00
(3) 講師と題目：
小野秀樹先生（東京大学）
「現代中国語研究の極私的展望」
山崎直樹先生（関西大学）
「第 2 言語習得論から見た「文法能力」：中国語教育における適用例を中心に」
(4) 聴講料：無料
(5) 申込者：130 名（内非会員は 16 名）、当日参加者：83 名（講師除く）

・アンケート結果

(1) 「希望する講義の数」については、「2 つ」が 84.2%であり、今回のセミナーは大多数の参加者の希望に沿っていたものといえる。
(2) 「講義の分野」の希望については、上位 3 つを挙げると「現代文法」(86.8%)、「歴史文法（近世）」(42.1%)、「音声」(39.5%)であった。
(3) 講義の理解度については、「大変よく理解できた」(60.5%)、「まずまず理解できた」(31.6%)であり、9 割以上の参加者が理解できたと評価している。
(4) 自由記述では前回同様、オンライン開催を評価するものが多かった。

**6. 顧問の委嘱について**

竹越会長より以下の報告があった。

・2023 年度第 1 回理事会において木村英樹会員と古屋昭弘会員に顧問を委嘱する件が承認され、ご本人からも内諾をいただいた。就任は 2024 年 4 月 1 日から。

**【審議事項】**

**1. 予算案・決算案**

1.1. 2022 年度会計決算案（資料参照）

・大西幹事による報告と説明、及び澤田達也会計監査による監査報告があり、原案の通り承認された。

1.2. 2023 年度会計補正予算案（同上）

・大西幹事による提案と説明があり、原案の通り承認された。

1.3. 2024 年度会計予算案（同上）

・大西幹事による提案と説明があり、原案の通り承認された。

**2. 会員名簿の廃止について**

・竹越会長より、2023 年度第 1 回理事会にて議決された紙媒体での会員名簿の廃止に関連して、代替として運用する会員相互検索システムの具体的な内容について提案があり、承認された。

**3.『中国語学辞典』PDF 版の販売について**

・竹越会長より、『中国語学辞典』PDF 版について、より低廉な価格での販売を岩波書店側に求めることが提案された。審議の結果、交渉については会長に一任することが決議された。

**4. その他**

・中国語学セミナーの今後の方向性について意見交換を行った。

・全国大会における予稿集のあり方について、意見交換を行った。

【投稿規程等の新旧対照表】

○投稿規程・執筆要領・テンプレート

| 旧 | 新 |
|---|---|
| **目次**<br>『中国語学』投稿規程<br>『中国語学』執筆要領<br>『中国語学』投稿申込表<br>『中国語学』投稿用原稿テンプレート<br>『中国語学』誓約書 | **目次**<br>『中国語学』投稿規程<br>『中国語学』執筆要領<br>~~『中国語学』投稿申込表~~［廃止に伴い削除］<br>『中国語学』投稿用原稿テンプレート<br>『中国語学』誓約書 |
| **『中国語学』投稿規程（2019 年 8 月改訂）**<br>一．掲載原稿<br>(1)投稿原稿<br>『中国語学』には会員から投稿された次の原稿（以下「投稿原稿」）を掲載する。投稿原稿は，本規程の二. から八. に定めた手続きに基づいて掲載される。 | **『中国語学』投稿規程（2023 年 9 月改定）**<br>一．掲載原稿<br>(1)投稿原稿<br>『中国語学』には会員から投稿された次の原稿（以下「投稿原稿」）を掲載する。投稿原稿は，本規程の二. から七. に定めた手続きに基づいて掲載される。［条項「三」と「四」を統合（下記参照），条項「四」の削除に伴う変更］ |
| 二．投稿条件<br>(2)未公刊であり，かつ『中国語学』以外の雑誌等に投稿中でないこと。学会の予稿集や科学研究費補助金研究の報告書に掲載されたもの，未公刊の修士論文・博士論文の一部などは，その旨を投稿申込表に記載すれば投稿できる。 | <br>(2)未公刊であり，かつ『中国語学』以外の雑誌等に投稿中でないこと。学会の予稿集や科学研究費補助金研究の報告書に掲載されたもの，未公刊の修士論文・博士論文の一部などは，その旨を投稿時に編集委員会への伝達事項の中で記載すれば投稿できる。 |
| 三．原稿の提出<br>投稿原稿は以下の要領を遵守し，提出するものとする。<br><br>(1)原稿の提出は電子メールによる。Word 形式と PDF 形式両方の電子データを，編集委員会のアドレス bianwei■chilin.jp（■を@に代える）まで送付すること。<br><br>(2)原稿の電子データは 2 月 20 日以降 3 月 10 日（日本時間 24 時）以前に送信すること。 | 三．原稿と誓約書の提出［「四」との統合に伴う大幅な変更］<br>投稿原稿と誓約書は以下の要領を遵守し，提出するものとする。<br>(1)原稿は Word 形式と PDF 形式の両方を，誓約書は自署した誓約書の画像データ（JPG、JPEG 等）を提出すること。［一部追加］<br>(2)原稿（Word 形式と PDF 形式）と誓約書の画像データの計 3 点を所定の投稿フォームから提出すること。投稿フォーム（URL を記載したリンク）は e-naf（オンライン会員情報管理システム）から確認すること。［追加］<br>(3)投稿フォームへの基本情報の入力，ならびに原稿（Word 形式と PDF 形式）と誓約書の画像データの提出は 2 月 20 日以降 3 月 10 日（日本時間 24 時）以前に行うこ |

<table>
<tr><td></td><td>と。［一部追加］</td></tr>
<tr><td>四．誓約書の提出<br>(1)誓約書の提出は電子メールによる。自署した誓約書の画像データ（JPG、JPEG 等）を編集委員会のアドレス bianwei■chilin.jp（■を@に代える）まで送付すること。<br>(2)誓約書の電子データは 2 月 20 日以降 3 月 10 日（日本時間 24 時）以前に送信すること。</td><td>~~四．誓約書の提出~~［「三」と統合，条項「四」を全て削除］<br>~~(1)誓約書の提出は電子メールによる。自署した誓約書の画像データ（JPG、JPEG 等）を編集委員会のアドレス bianwei■chilin.jp（■を@に代える）まで送付すること。~~<br>~~(2)誓約書の電子データは 2 月 20 日以降 3 月 10 日（日本時間 24 時）以前に送信すること。~~</td></tr>
<tr><td>五．査読と採否の決定<br>(1) 編集委員会は，投稿原稿が扱う領域の研究者（1 編につき 3 名，非会員を含むことがある）を査読者として選び，評価を委嘱する。<br>(2)「採用」の場合は，編集委員会が通知した期日までに，最終原稿の電子データを編集委員長宛に送付する。<br>(3)「要二次審査」の場合は，編集委員会が通知した期日までに，修正原稿と修正内容リストの電子データを編集委員長宛に送付する。編集委員会は修正内容を確認し，採否を最終的に決定する。その際，査読者に意見を求める場合がある。二次審査の結果，「採用」になった場合は，編集委員会が通知した期日までに，最終原稿の電子データを編集委員長宛に送付する。</td><td>四．査読と採否の決定［条項「四」の削除に伴う変更］<br>(1) 編集委員会は，投稿原稿が扱う領域の研究者（1 篇につき 3 名，非会員を含むことがある）を査読者として選び，評価を委嘱する。<br>(2)「採用」の場合は，編集委員会が通知した期日までに，最終原稿の電子データを別途通知する投稿フォームから送付する。<br>(3)「要二次審査」の場合は，編集委員会が通知した期日までに，修正原稿と修正内容リストの電子データを別途通知する投稿フォームから送付する。編集委員会は修正内容を確認し，採否を最終的に決定する。その際，査読者に意見を求める場合がある。二次審査の結果，「採用」になった場合は，編集委員会が通知した期日までに，最終原稿の電子データを同じく別途通知する投稿フォームから送付する。</td></tr>
<tr><td>六．校正，印刷</td><td>五．校正，印刷［同上］</td></tr>
<tr><td>七．ウェブでの公開</td><td>六．ウェブでの公開［同上］</td></tr>
<tr><td>八．その他</td><td>七．その他［同上］</td></tr>
<tr><td>『中国語学』執筆要領（2019 年 8 月改訂）<br>1．使用言語<br><table><tr><td>本文</td><td>タイトル・執筆者氏名</td></tr><tr><td>日本語</td><td>日本語・英語［注］</td></tr><tr><td>中国語</td><td>中国語・英語［注］</td></tr><tr><td>英語</td><td>英語・中国語</td></tr></table></td><td>『中国語学』執筆要領（2023 年 9 月改定）<br>1．使用言語<br><table><tr><td>本文</td><td>タイトル・執筆者氏名</td></tr><tr><td>日本語</td><td>日本語と英語［注］</td></tr><tr><td>中国語</td><td>中国語と英語［注］</td></tr><tr><td>英語</td><td>英語と中国語</td></tr></table></td></tr>
<tr><td>3．論文本体の書式と分量<br>◇ 論文本体は，（中略）一切受理しない。<br>［参考数値］テンプレートの書式は以下の設定である。</td><td></td></tr>
</table>

| | |
|---|---|
| ■文字ポイント<br>参考文献：8 ポイント，　参考文献の 2 行目以降の字落とし：2 文字分<br><br>◇ 図表のある場合は，その内部の文字（地図の中の記号などは除く）は原則として 6 ポイント以上とする。表の場合は文字数や行数を大幅に増加させてはいけない。なお，図表や参考資料がある場合には，それらを含めて規定のページ以内におさまるようにする。<br><br>◇本文の文字フォントについては，日本語については「明朝体」，中国語については，簡体字は「SimSun」，繁体字は「MingLiu」または「SimSun」を，欧文は「Times New Roman」を用いることが望ましい（但し，本文が日本語で中国語の引用例が繁体字である場合，引用例は「明朝体」を用いてもよい）。なお、（中略）が望ましい。やむを得ず特殊なフォントを使用する場合は，その旨が分かるように編集委員会宛にメモなどを添える。 | ■文字ポイント<br>参照文献：8 ポイント，　参照文献の 2 行目以降の字落とし：2 文字分<br><br>◇ 図表がある場合は，その内部の文字（地図の中の記号などは除く）は原則として 6 ポイント以上とする。表の場合は文字数や行数を大幅に増加させてはいけない。なお，図表や参考資料がある場合には，それらを含めて規定のページ以内におさまるようにする。<br><br>◇本文の文字フォントについては，日本語については「明朝体」，中国語については，簡体字は「SimSun」，繁体字は「MingLiu」または「SimSun」を，欧文・アラビア数字は「Times New Roman」を用いることが望ましい（但し，本文が日本語で中国語の引用例が繁体字である場合，引用例は「明朝体」を用いてもよい）。なお、（中略）が望ましい。やむを得ず特殊なフォントを使用する場合は，その旨が分かるように投稿時に編集委員会への伝達事項の中で伝える。 |
| 4. 投稿原稿の構成<br>◇投稿原稿は「『中国語学』投稿申込表」（以下「申込表」）と「論文本体」からなる。<br>◇提出の際は，「申込表」と「論文本体」の電子データを bianwei■chilin.jp（■を@に代える）まで送付する。「申込表」と「論文本体」の電子データは，Word 形式と PDF 形式の両方を提出する。「申込表」は中国語学会サイト内の「『中国語学』投稿申込表」テンプレートを使用すること。<br><br>4-1. 本文が日本語の場合<br>（中略）<br>5. 参照文献一覧<br>6. 英語の論文タイトル，サマリー（100 語以内），キーワード（3 個以上 5 個まで）［査読結果通知後に提出する］<br><br>4-2. 本文が中国語の場合<br>（中略） | 4. 投稿原稿の構成<br>~~◇投稿原稿は「『中国語学』投稿申込表」（以下「申込表」）と「論文本体」からなる。~~［申込表の廃止に伴い削除］<br>~~◇提出の際は，「申込表」と「論文本体」の電子データを bianwei■chilin.jp（■を@に代える）まで送付する。「申込表」と「論文本体」の電子データは，Word 形式と PDF 形式の両方を提出する。「申込表」は中国語学会サイト内の「『中国語学』投稿申込表」テンプレートを使用すること。~~［同上］<br>4-1. 本文が日本語の場合<br>（中略）<br>5. 参照文献一覧（日本語文献，中国語文献，欧文文献の順に列挙する）<br>6. 英語の論文タイトル，サマリー（100 語以内），キーワード（3 個以上 5 個まで）［査読結果通知後に提出する。］<br>4-2. 本文が中国語の場合<br>（中略） |

| | |
|---|---|
| 5. 参照文献一覧<br><br>4-3. 本文が英語の場合<br>（中略）<br>5. 参照文献一覧 | 5. 参照文献一覧（中国語文献，日本語文献，欧文文献の順に列挙する）<br>4-3. 本文が英語の場合<br>（中略）<br>5. 参照文献一覧（欧文文献，日本語文献，中国語文献の順に列挙する） |
| 6. 引用例の出典<br>◇ 筆者の母語以外の言語による作例は，信頼できる母語話者の校閲を経たものでなければならない。 | 6. 引用例の出典<br>◇ 執筆者の母語以外の言語による作例は，信頼できる母語話者の校閲を経たものでなければならない。 |
| **『中国語学』投稿申込表**<br>日本語・中国語兼用（word） | ~~**『中国語学』投稿申込表**~~[廃止に伴い削除]<br>~~日本語・中国語兼用（word）~~[同上] |

○論文の執筆・投稿に当っての注意点　⇒　論文の執筆・投稿に当たっての注意点

| 旧 | 新 |
|---|---|
| 編集委員会（2019 年 1 月修正） | 編集委員会（2023 年 9 月改定） |
| 論文の執筆・投稿の際には必ず、学会ホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領の全体を熟読してください。<br>とりわけ次の 5 点にご留意ください。 | 論文の執筆・投稿の際には必ず，学会ホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領の全体を熟読してください。<br>とりわけ次の 5 点にご留意ください。 |
| （2）投稿原稿は電子データのみにより提出するものとし、紙媒体の送付は不要です。電子データは 3 月 10 日（日本時間 24 時）以前に bianwei■chilin.jp（■を@に代える）に送信してください。期日をこえた投稿はいかなる理由があっても受理しません。また『中国語学』奥付にある「学会事務局」では原稿の受付を行っていませんので、ご注意ください。<br>なお編集委員会は電子データ受領後、受領確認メールを折り返し送付します。受領確認メールが投稿原稿送信後 24 時間以内に届かない場合、直ちに yosikawa■boz.c.u-tokyo.ac.jp（■を@に代える）にご連絡ください。 | （2）投稿原稿は電子データのみにより提出するものとし，紙媒体の送付は不要です。電子データは 3 月 10 日（日本時間 24 時）以前に所定の投稿フォームから送信してください。期日をこえた投稿はいかなる理由があっても受理しません。また『中国語学』奥付にある「学会事務局」では原稿の受付を行っていませんので，ご注意ください。<br>なお，編集委員会は電子データ受領後，受領確認メールを折り返し送付します。受領確認メールが投稿原稿送信後 24 時間以内に届かない場合，直ちに yosikawa■boz.c.u-tokyo.ac.jp（■を@に代える）にご連絡ください。 |
| （3）投稿時に必要な電子データは以下 5 点です：①「投稿申込表」Word ファイル、②「投稿申込表」PDF ファイル、③「論文本体」Word ファイル、④「論文本体」PDF ファイル、⑤「誓約書」電子データ（JPG、JPEG 等）。 | （3）投稿時に必要な電子データは以下 3 点です：①~~「投稿申込表」Word ファイル、②「投稿申込表」PDF ファイル、③~~[削除]「論文本体」Word ファイル，②「論文本体」PDF ファイル，③「誓約書」画像データ（JPG，JPEG 等）。 |

| | |
|---|---|
| (4) 本文が日本語・中国語の場合、投稿時には英語のタイトル、サマリー、キーワードは不要です。これらは採用／要二次審査となった場合に提出していただきます。 | (4) 本文が日本語・中国語の場合，投稿時には英語のタイトル，サマリー，キーワードは不要です。これらは採用／要二次審査となった場合に提出していただきます。 |
| (5) 投稿原稿は「投稿用原稿テンプレート」(学会ホームページ「投稿規程・執筆要領・テンプレート」からダウンロード可) を使用しての作成が原則です。テンプレートを使用していない、あるいはその書式を改変して書かれた投稿原稿は執筆要領違反となります。 | (5) 投稿原稿は「投稿用原稿テンプレート」(学会ホームページ「投稿規程・執筆要領・テンプレート」からダウンロード可) を使用しての作成が原則です。テンプレートを使用していない，あるいはその書式を改変して書かれた投稿原稿は執筆要領違反となります。 |

○『中国語学』バックナンバーの電子アーカイブ化に伴う著作権行使の許諾に関する公告（お願い)

| 旧 | 新 |
|---|---|
| PDF 形式のファイルご覧いただくには Adobe 社から無償で配布されている Adobe Reader が必要です。 | PDF 形式のファイルをご覧いただくには，Adobe 社から無償で配布されている Adobe Reader が必要です。 |

## 2022 年度会計決算書　　2023 年 11 月 4 日総会承認

**日本中国語学会2022年度会計決算書（案）（2022年4月1日～2023年3月31日）**

〈収入の部〉　　単位：円

| 収入 | 予算 | 決算 |
|---|---|---|
| 前年度繰越金 | 5,522,427 | 8,636,059 |
| 積立からの繰入金 | 3,560,000 | 3,560,000 |
| 通常会員・海外会員会費収入 | 5,000,000 | 5,133,185 |
| 賛助会員会費収入 | 600,000 | 630,000 |
| 『中国語学』売上金 | 400,000 | 368,828 |
| 学界展望補助金 | 300,000 | 300,000 |
| 中国語学セミナー受講料 | | 84,191 |
| 中国語学辞典印税 | | 202,774 |
| 中国語学辞典寄付金残金 | | 325,340 |
| 定額貯金利子 | | 6,788 |
| 通常貯金利子 | | 94 |
| 計 | 15,382,427 | 19,247,259 |

備考：中国語学辞典寄付金3,000,000円

〈支出の部〉　　単位：円

| 支出 | 予算 | 決算 |
|---|---|---|
| 会誌印刷費 | 2,000,000 | 1,537,998 |
| 大会助成費 | 300,000 | 100,000 |
| 支部活動助成費 | 200,000 | 56,000 |
| 中国語学セミナー開催経費 | 200,000 | 88,800 |
| 通信費 | 300,000 | 232,353 |
| 事務費 | 2,000,000 | 1,680,653 |
| 大会事務費 | 300,000 | 0 |
| 学会連合等年会費 | 42,000 | 30,000 |
| 事務局費 | 450,000 | 450,000 |
| 編集委員会経費 | 120,000 | 102,281 |
| 学界展望編集委員会経費 | 300,000 | 300,000 |
| ウェブリソース委員会経費 | 120,000 | 73,000 |
| ホームページ関連経費 | 180,000 | 82,638 |
| 大会運営委員会経費 | 220,000 | 172,269 |
| 辞典編纂委員会経費 | 120,000 | 0 |
| 旅費交通費 | 700,000 | 0 |
| 会議費等雑費 | 180,000 | 0 |
| 学会奨励賞 | 100,000 | 0 |
| 会員名簿印刷費 | 800,000 | 661,100 |
| 積立金<br>[内訳]<br>記念大会積立金（44万）<br>事務委託関係積立金（136万）<br>ウェブサイト構築積立金（50万）<br>国際会議開催支援積立金（40万）<br>コロナ禍基金（100万） | 3,700,000 | 3,700,000 |
| 予備費 | 3,050,427 | 9,980,167 |
| 計 | 15,382,427 | 19,247,259 |

監査の結果、経理内容は適切であり、経理諸表は的確に処理されているものと認めます。

2023年9月12日

2022年度会計監査　澤田達也　印

2022年度会計監査　中田聡美　印

## 2023 年度会計補正予算案（2023 年 4 月～2024 年 3 月）

2023 年 11 月 4 日総会承認

単位：円

| ＜収入＞ | |
|---|---|
| 前年度繰越金 | 9,980,167 |
| 積立からの繰入金 | 3,700,000 |
| 通常会員・海外会員会費収入 | 5,000,000 |
| 賛助会員会費収入 | 600,000 |
| 『中国語学』売上金 | 400,000 |
| 学界展望補助金 | 300,000 |
| 計 | 19,980,167 |

| ＜支出＞ | |
|---|---|
| 会誌印刷費 | 2,000,000 |
| 大会助成費 | 300,000 |
| 支部活動助成費 | 200,000 |
| 中国語学セミナー開催経費 | 200,000 |
| 通信費 | 300,000 |
| 事務費 | 2,000,000 |
| 大会事務費 | 300,000 |
| 学会連合等年会費 | 30,000 |
| 事務局費 | 450,000 |
| 編集委員会経費 | 120,000 |
| 学界展望編集委員会経費 | 300,000 |
| ウェブリソース委員会経費 | 120,000 |
| ホームページ関連経費 | 180,000 |
| 大会運営委員会経費 | 220,000 |
| 選挙関連費 | 160,000 |
| 旅費交通費 | 700,000 |
| 会議費等雑費 | 180,000 |
| 学会奨励賞 | 100,000 |
| 積立金 | 4,840,000 |
| [内訳] | |
| 記念大会積立金(46万) | |
| 事務委託関係積立金(138万) | |
| ウェブサイト構築等積立金(50万) | |
| 国際会議開催支援積立金(50万) | |
| コロナ禍基金(200万) | |
| 予備費 | 7,280,167 |
| 計 | 19,980,167 |

## 2024 年度会計予算案（2024 年 4 月～2025 年 3 月）　2023 年 11 月 4 日総会承認

単位：円

| ＜収入＞ | |
|---|---|
| 前年度繰越金 | 7,280,167 |
| 積立からの繰入金 | 4,840,000 |
| 通常会員・海外会員会費収入 | 5,000,000 |
| 賛助会員会費収入 | 600,000 |
| 『中国語学』売上金 | 400,000 |
| 学界展望補助金 | 300,000 |
| 計 | 18,420,167 |

| ＜支出＞ | |
|---|---|
| 会誌印刷費 | 2,000,000 |
| 大会助成費 | 300,000 |
| 支部活動助成費 | 200,000 |
| 中国語学セミナー開催経費 | 200,000 |
| 通信費 | 300,000 |
| 事務費 | 2,000,000 |
| 大会事務費 | 300,000 |
| 学会連合等年会費 | 30,000 |
| 事務局費 | 450,000 |
| 編集委員会経費 | 120,000 |
| 学界展望編集委員会経費 | 300,000 |
| ウェブリソース委員会経費 | 120,000 |
| ホームページ関連経費 | 180,000 |
| 大会運営委員会経費 | 220,000 |
| 旅費交通費 | 700,000 |
| 会議費等雑費 | 180,000 |
| 学会奨励賞 | 100,000 |
| 積立金 | 4,880,000 |
| [内訳] | |
| 記念大会積立金(48万) | |
| 事務委託関係積立金(140万) | |
| ウェブサイト構築等積立金(50万) | |
| 国際会議開催支援積立金(50万) | |
| コロナ禍基金(200万) | |
| 予備費 | 5,840,167 |
| 計 | 18,420,167 |

## 例会および全国大会開催のお知らせ

### 今年度の例会実施予定

各支部における今後の例会実施予定は次のようになっています。

関東支部：2023 年 2 月

北陸支部：2023 年 3 月

次年度以降もひきつづき支部例会への参会を歓迎いたします。発表者の方には発表要旨（300 字以内）の事前提出をお願いしています。この要旨は、学会ウェブサイト上の例会案内のページで紹介し、年に 2 回発行の学会ニューズレターにも掲載されます。

なお、開催予定は変更になることもありますので、詳細は各支部例会世話人までお問い合わせ下さい。担当者の連絡先については、学会ウェブサイトをご参照下さい。

また、次年度以降もオンライン開催を原則とするかどうかについては、決定次第、学会ウェブサイト等でお知らせいたします。

（事務局）

### 第 74 回全国大会開催のお知らせ

日本中国語学会第 74 回全国大会は、2024 年 11 月ごろに関西外国語大学（枚方市）にて開催する予定です。開催日程は決定次第お知らせいたします。また、ワークショップおよび一般研究発表の応募要項についても、決定次第学会ウェブサイトに掲載いたします。

（第 74 回全国大会準備会）

## 事務局からのお知らせ

**■ 『中国語学』271 号投稿論文募集**

『中国語学』第 271 号の投稿論文を募集しています。締切は 2024 年 3 月 10 日(日)です。執筆要項、投稿規定、テンプレートなどにつきましては学会サイトをご参照下さい。

https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/journal/contribution.html

**■ 会員名簿の廃止と会員検索システムの導入について**

このたび、隔年で会員に送付してきた紙版の会員名簿を廃止し、オンライン会員管理システム（e-naf）における会員検索機能をもってそれに替えることになりました。2024 年 4 月 1 日からの運用を予定しています。検索可能な会員情報の範囲は、これまでの会員名簿における公開・非公開の別に準じます。会員の皆様におかれましては、2024 年 2 月末日までに、e-naf 上でご自身の会員ページにアクセスしていただき、いま一度登録している情報とそれぞれの公開・非公開についての確認をお願いいたします。非公開の情報については、「上記情報を名簿に掲載しない」の欄にチェックが入っています。なお、2023 年 3 月はシステム

導入のための準備期間としますが、登録情報の変更は 4 月以降に随時可能です。

**郵便振替　加入者名：日本中国語学会**
**口座番号：00980-6-282216**

**■　退会について**

退会は会費納付が前提となっています。退会希望の方は必ず会費納付後の年度内にお申し出下さい。

**■　住所不明の会員**

お知り合いの方がおられましたら、ご連絡をお願いします。

荒屋勸、泉興長、張桂珠、鄭亨奎、丁鋒、苞山武義、楊明、呂昭明、井川壽子、小松紘一郎、陳瑩、李鵬、張翼翔、若林ゆりん、小西真帆、郭楊、孫琰、鄭欣悦、徐佳、大久保蛍、蔡子文、林智、劉峪伽　（敬称略）

**■　2023 年度会費納入のお願い**

会費未納の方には、11月に振込用紙を同封して納入依頼のご連絡をお送りしました。年会費（一般会員6,000円）を最寄りの郵便局からお振込下さい。速やかにご入金下さいますよう、御協力をお願いします。

**■　顧問・名誉会員の推挙**

顧問・名誉会員の推挙は、推薦文を添えて2024年9月30日までに学会事務局宛にお願いします。

**■　予稿集の販売**

過去の大会予稿集は、第69回以前のものは好文出版にて1,500円でお求めになれます。第70回以降の大会予稿集は電子版のみの発行（非売品）です。詳しくは学会ウェブサイトをご覧下さい。在庫につきましては好文出版（order@kohbun.co.jp）に直接お問い合わせ下さい。

**■　事務局への問い合わせ**

各会員の登録情報は、学会ウェブサイト（https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/）内の e-naf（オンライン会員情報管理システム）から、会員ご自身でログインして確認と更新ができます。事務局への問合せは、学会ウェブサイトの「お問い合わせ」ページをご利用下さい。

**日本中国語学会会報　2023 年秋季**
（年二回発行）
発行者：日本中国語学会事務局
〒651-2187　神戸市西区学園東町 9-1
神戸市外国語大学中国学科内
E-mail: jimukyok_clsj@chilin.jp
URL: http://www.chilin.jp/
発行日：2023 年 12 月 19 日